東京で生まれて、東京以外から出たことがない私は、
都市の人口の過密、忙しさ、緑のなさ、夏の気温などのことで、危機感を覚えていました。
東京のコンクリートをはがして、木を植えて、木陰で暮らしたい。
2006 年、犬を飼ったことで緑の中にでかけることが多くなり、
いのちは、他ならぬ植物たちに癒されるということを日に日に実感するようになりました。
そんなところに、屋久島に出合い「いのちは水」なんだということを深く感じ、
自然のきれいな水の循環の中で生きたい、と希求するようになっていました。

人間がエゴイスティックに積み上げて来てしまったことの応えなのだ、と、まずは受けとめました。
2010 年、年明け、東京で暮らしていくことにいよいよ限界を感じて、
東京を出てみたいと準備をしていたところへ震災。

移住

仲間が恋しくて。

最初の半年は、都市で暮らしてきたこと、資本主義にどっぷりと使って生きてきたことに苦しむ一方、
ほとんどのものはいらなかったんだと感じるすがすがしさ。
ずっと求めて来た、自然や、海や野菜やきれいな水に囲まれて生きることの幸せも感じていました。

情報の多さ、どんどん進んで行くコンピューターなどに、アナログな私はついていかれず、
また、ついていく必要もあまり感じませんでした。
ついていけたらワクワクだろうなあ、と思いもする一方、
そのことに取り組む時間がもったいないなあ、、、、と、優先順位が低くなっていったのです。
東京でしか暮らしたことのない、私は、田舎暮らしをしてもともと田舎向きだったのかも、、、と、
なんども思いました。

オーストラリアのマレーニのコミュニティーを手がけたジルジョーダンに出会ったことは、
私の人生にとって必要不可欠なことでしたが、そのジルが言った「あなたはあなたの場所でやりなさい」
という言葉が何度も何度もハートに響いていました。

半泊村という小さな集落にまずは暮らし、限界集落再生プロジェクトに取り組んでいる
夫婦の暮らす分校で、カフェとゲストハウスから始めました。
コミュニティーデザインについてたくさんの話をききました。
コミュニティーデザインという言葉がはやりになっていましたね。
カフェやゲストハウスに、都会のセンスを持ち込んで、
インテリアや食器やしつらえも都会的な感じにしたことで、
たくさんのいらっしゃったお客様によろこんでもらうことができました。

五島列島福江島は、長崎県の島で日本の最西端。東京とほぼ緯度が同じで南国ではなく冬には雪も降ります。
かつてピークには 12 万人いた人口が今では 4 万人をきっていて、いわゆる過疎の集落がたくさんあります。

日本には水道、ガス、電気が供給されることができる、休耕田をもつ集落がたくさんあり、
そんな集落をいかしていくことは、とっても利にかなった未来の設計図だと思いました。

1年と7ヶ月、この五島列島福江島暮らしに飛び込んできてからのいろいろをお話したいと思います。

都会で生まれ育ち、田舎ももっていなかった私にとって、どんなことがギャップだったのか、たくさんの発見がありました。
移住のキーになるのは、どこで、誰と生きていくのか、ということだと思いました。
五島に親戚や友人がいたわけではなく、活動をしている一二度会ったことのある人をつてに
五島にいきましたが、すぐに、長年気のあった人々と生きていた貴重さを痛感し、
とっても寂しい思いをしていましたが、都会に帰る気にはならず、他の場所へ移る体力もありませんでした。

幸いなことに、一人2人と、こちらでも意識のあう仲間と出合い、支えてもらいながらなんとか頑張っていました。

ローカルでの課題は、仕事を創りだすこと。
よさは、家賃、食費などの暮らしが、とっても安いこと。いただくものもとっても多くて、
畑などをすればさらに食費がかからないのです。
暮らしが安いということは、ほんとうに気分が楽になります。
五島は食材が新鮮で豊富なのです。お米、野菜、魚介類、そして畜産もしています。
ちいさな島の中にすべてがあるので、島として自立したらいいのに、とよく仲間と話しています。

五島では残念ながらまだ、エコロジカルなホリスティックな意識が低いのではないかと思います。
決してもともとエゴイスティックなわけではなく、その必要がなかったのだと思います。
普通の農協が主催する農業をやり、大地が農薬や除草剤で汚染され、近海の海から魚が減ってしまったこと。
漁業が衰退することで、雇用がなくなり、人が減ってしまう。
人手がへることで、老人ばかりになり、体力的にきついので、さらに農薬や除草剤を使ってしまう。

オルタナティブな暮らしには、お金はかからない工夫がいくらでもあり、
それはわくわくする楽しいことでもあります。

すみからすみまで自分の暮らしを見直して、考えて、手間ひまをかけて創り上げる自分だけの暮らし
田舎ぐらしは、のんびりしているように見えて、忙しいのです。
豊かな創造力と、思ったことを実行できる体力と、少しの蓄えがあるうちに、はじめませんか？

たとえば、お米をつくり、野菜をつくり、梅干しをつくり、ハーブを育て、
採取した果実でジャムをつくり、作ったジャムを友人たちにくばり、かわりにいただいた栗をゆでひとつひとつ剥いて、、、、。

芋がとれたら、粉にして、お餅をつくって。
このようなことは、普通に押し寄せてきます。楽しいことですが。忙しいのです。

今まではお金を出して、人が作ってくれていたものを購入していたのだなぁ、、、
それが商店のはじまりだったのかなぁ、と実感。

こちらにきてみつけたことは、自分が手で何かを創りだすのが好きだったということでした。
まずはお料理。
好きなことは仕事にしてはいけないという鉄則がありますが、毎週末だけのお料理は、
ちょうどの喜びになりました。
食材が自分の工夫でお料理になり、食べて喜んでいただけることは、さらに次の料理のプランになりました。

そして、器づくり。やはり、ただの粘土の塊から、有効なものを創りだしていくよろこび。
土と、水と、火と、木と、金。陶器づくりはまさに、自然界の五行と戯れることで、
だからたくさんの人が好きなのでしょう。

仕事は 4 つくらい持つのがいい、と東京にいたころから考えて、友達たちにも話をしていました。
それは、オーストラリアのコミュニティーで学んだことでした。
日本では、一芸にひいでるプロフェッショナルがよいと近年されてきましたが、
江戸のころは違いました。もちろん、好きで、のめりこんでしまい一芸に秀でてしまう天才は OK です。
普通の人は、たとえば、「漁師であり、大工であり、笛の演奏者であり、園芸好きな人」や、
「料理をし、器を売り、写真がとれて、旅の達人」だったり、「大工であり、看板家であり、
ユンボのドライバーであり、字を書くのが上手い」など。
ひとつひとつの仕事が、かぶらなくて、かつなんとなくつながっていて、いいと思うのです。
いくつかの収入の可能性をもつということは、一方、ワークシェアにもつながるのです。
ひとつひとつは、三流でもよいと思うのです。地域のひとの役にたつくらいはできるのです。
4 つの仕事をもつということは、4つのコミュニティーに属しているということで、交流が多岐にわたり、
他の仕事にも相乗効果をうむでしょう。

一年半もすぎ、たくさんのことを感じてきた日々でしたが、とっても学び多いい時間でした。
私にとっては、たまたまご縁が五島でしたので、この五島をもう少し応援していきたいと思っています。
東京からは飛行機を乗り継いでの行程になりますが、ぜひ、このゆっくりした美しい五島にいらしてください。来年は”癒しのリトリートツアー”も企画しています。

17 日当日は、この一年半の活動を自然や元気な犬たちの写真をまじえながらお伝えしていきたいと思います。
どうぞ、よろしくお願いいたします。
お待ちしています。

瑳山 ゆり